



## はだかの王さま (1)

いまからずっとずっとむかしの  
こと、ひとりの皇帝がいました。  
皇帝は、あたらしい、きれいな着  
物がなによりも好きでした。持っ  
ているお金をのこらず着物に使っ  
て、いつもいつも、きれいに着か  
ざっていました。皇帝は、自分の  
あたらしい着物を人に見せたいと  
思うときのほかは、兵隊のことも、  
芝居のことも、森へ遠乗りするこ



## はだかの王さま (2)

---

とも、なにからなにまで、きれいさっぱり忘れていたのです。

とにかく、皇帝は、一日のうち一時間ごとに、ちがった着物に着かえるのです。ですから、よその国ならば、王さまは、会議に出ていらっしやいます、というところを、この国ではいつも、「皇帝は、衣装部屋にいらっしやいます」と、言いました。――

---



## はだかの王さま (3)

皇帝の住んでいる大きな町は、たいへんにぎやかなところでした。毎日毎日、よその国の人たちが大ぜい来ました。

ある日のこと、ふたりのうそつきがやってきました。ふたりは、「わたしどもは、<sup>はたお</sup>機織りでして、みなさんの思いもおよばない、美しい織物を織ることが出来ます。それに、そその織物は色とがらと



## はだかの王さま (4)

が、びっくりするほど美しいばかりではございません。その織物でこしらえた着物は、まことにふしぎな性質をもっておりまして、自分の役目にふさわしくない人や、どうにも手のつけられないようなばかものには、この着物は見えないのでございます」と、言いふらしました。

「ふうん、それはまた、おもしろ



## はだかの王さま (5)

「衣着物だな」と、皇帝は考えました。「そのような着物を着れば、この国のどの役人が役目にふさわしくないか、知ることができるわけじゃな。それから、りこうものと、ばかものを見わけることもできるわけだ。そうだ、さっそく、その織物を織らせるとしよう」

つづく